

会 長 挨拶

協力隊まつりが4月下旬JICA地球ひろばで開催されました。いつものような協力隊OBOGの同窓会みたいなものです。出展団体は隊員派遣国のOV会や職種に関連するOV会がメインで、当会のような各県OB会は少数派です。映画「クロスロード」や民族音楽、ネパール応援セミナーやJICAボランティア応募相談などたくさんの企画がありました。広尾から市ヶ谷に協力隊まつりが移って早4年、来場者が2,000人を超えるまでになりました。

今回特に思いを新たにしたのは出展団体としてのOBOGや来場者としてのOBOGの熱気です。今では誰も覚えていないかもしれませんが、昔の隊員募集のキャッチフレーズに「**持続する情熱**」と言うのがありました。環境劣悪な開発途上国で2年間のボランティア活動を行うには、「隊員になりたい」「貧しい人々のために活動したい」と協力隊を目指した初心を忘れず、熱意を持ち続けること、すなわち「**持続する情熱**」が必要なのです。

50年以上も一つの事業を続けているとマンネリ化や慣れが生じ、事業に対する熱意が薄れてきます。民主党の事業仕分けや行政レビューで痛い目に遭った協力隊事務局はカメが外敵から身を守るように首を引っ込め、恐る恐る事業を展開しているように見えるのは年寄りの偏見でしょうか。わずか3年前のJOCV設立50周年で声高らかに宣言した「次の50年」はどこに行ったのでしょうか？ 予算がない、何がないと憂いばかりが先行する協力隊事業の現状、事業に携わるJICA職員等関係者が失ってしまったもの、それは「協力隊事業に対する情熱」なのではないかと思っています。

それにしても、協力隊まつりに参加しているOBOGの熱意や熱気はなんなのでしょうね。その熱意や熱気はどこから来ているのでしょうか？

同じ国に派遣されたという極めてシンプルな事実で年齢性別を超えて理解できる、日本国中探してもこのような人々はなかなかいないように思います。今風に言うと「絆」って言うのでしょうか。まつり会場で色々なOBOGとお話すれば、「任国が本当に好きなんだな」「協力隊に参加したことがその後の人生の原点になっているんだな」としみじみ思います。

そして、今日現在も開発途上国のどこかで悪戦苦闘している隊員に思いを馳せるのです。「ボランティア活動は、明るく、元気に、そして楽しく」と言い続けてきましたが、志半ばで亡くなった隊員が多数いることもまぎれもない事実、元気に帰国してくれることを切に願ってやみません。

青年海外協力隊千葉OB会 会長 浜田真一
(昭和51年度2次隊前期、ケニア)